

# 48年 の 女 性 像 (2)

## —Eugénie Niboyet—

加 藤 節 子

48年の女性新聞 *Voix des Femmes* (女性の声) 紙については「Sand et la Révolution de février」<sup>(1)</sup>で多少ふれたことがあったが、この新聞に集り、フェミニスト運動をすすめた女性たち、Eugénie Niboyet, Jeanne Deroin, Pauline Roland, Desirée Gay, Suzanne Voilquin, Elisa Lemonnierといったブルジョアもいればプロレタリアもいる、多彩で、個性的な女性たちの活動はめざましいものがあり、2月革命挫折後の彼女たちの運命も劇的で、女性史の面からもユニークな一時期だといえよう。この女性新聞 *Voix des Femmes* の編集長であったウージェニー・ニボワイエを今回はとりあげたい。

*Voix des Femmes* は革命一ヶ月後の3月20日に創刊され、6月虐殺のあった6月半ばに廃刊になったわずか3ヶ月足らずの短命な新聞であるが、豊かな内容をもった大新聞であった。創刊されるとすぐ日刊になり、かなりの発行部数をもっていた。

E. Niboyet はその創刊のいきさつを次のように語っている。彼女が小説 *Catherine II et ses filles d'honneur* を出版した直後2月革命が勃発した。しばらくするとその出版者が彼女に会いに来て「こんな重大な時期にあなたは手を拱いているのですか」と言うのである。彼女は「えゝ私は時期を待っているのです」と答えたのだが、翌日フォブール・サン=トノレで、銃や叉鋤や棒切れを持った一群が通るのに出くわした。その中にかなりの数の女性が混っていた。「大革命の時のトリコトゥーズ<sup>(2)</sup>のような女たちがでてきて、折角の共和国を台無しにしなければよいが」という心配にかられ、すぐに女性を集め

て教育しなければならないと決心したと述べている。見本号をつくるとそれは忽ち売り切れた。彼女のアパートは大勢の女性がつめかけ、ブルジョアもプロレタリアも一緒になって議論し新聞をつくる場と変貌した。*Voix des Femmes* は社会主義的フェミニズムの立場をとって、とりわけ選挙権や女性の労働問題を一貫して追求する大新聞に育っていき、選挙時にはその支持を頼みにくる候補者も多かった。しかしひとりわけ G. Sand とのいきさつで有名になった。Sand が彼女たちフェミニストを軽蔑乃至無視しているとは知らず、Sand の新聞 *Cause du Peuple* の中の論文 *Aux Riches* を転載までしている。共和国政府が平等をスローガンにしながら、女性に対しては選挙権も被選挙権も与えない矛盾をつく論説が毎日のように *Voix des Femmes* に書きたてられていたが、ふだんは慎重な Niboyet が勢にかられたあまり Sand の同意を得ることもなく Sand を候補者に推薦してしまった。そして Sand から手ひどいしつப返しを受けたのである。*Voix des Femmes* を無視して *Réforme* 紙などに Sand は婦人クラブの看板とみなされることを許さないという、にべもない拒絶文を載せたのである。Niboyet はそれに対して「いいえ、私たちは私たちの女性の大義にあなたの栄光の笠を着せようとしたのではありません。何故なら私たちの主張はそれだけで充分立派なものであり、充分正しいもので、胸を張って歩めるものですし、弁護を必要としていません。今日、人々は思想に従っているのであって、人間に従っているのではありません。原理に従っているのであって個人にではありません。共和国は才能の特権を廃することはしませんでしたがそれに義務を課すことによって制限を加えたのです」と反駁している。有名な大作家に対して引けを取らない反論ぶり、彼女のこの確信の強さ、この信念はどこから来たのであろうか。私は彼女の来歴に強い関心をそゝられた。これは革命のお祭りさわぎで突然生まれた運動ではない。プロレタリア女性とブルジョア女性のオルガナイザーとなった Niboyet のこの新聞には層の厚い底流があった。情熱にあふれ、ひたむきに市民権、参政権を求める彼女たちの言葉には、非常にラディカルな言い方もあるれば、過激をさけようとする言い方もある。しかし「女性の大義」のための運動、女性のユマニズム運動には共通した発想法が感じられる。事実彼女たちは全く面識のない人々ばかりではな

かつたのである。

### サン=シモン主義

Eugénie Niboyet は1797年にモンペリエで生れた。祖父はディドロの百科辞典に執筆しているジュネーブの文筆家 Pierre Mouchon<sup>(3)</sup>で、祖母は有名な物理学者 Lesage の娘であった。父はモンペリエで医学を学び、南仏 Gard 県の牧師の娘と結婚。スイスの自由思想で育てられた父 Mouchon は恐怖時代の過激を嫌ったため迫害され、セヴェンヌ山に逃れた。帝政時代になって山を下り、家庭に戻った父は三人の息子をボナパルチストに育てた。長兄 Louis は Teste 将軍の副官としてモスクワ遠征の途で戦死。三兄の化学者 Emile も軍医として捕虜になったことがある。王政復古時代にはボナパルチストの彼女の家族や親戚たちは当時住んでいたリヨンで投獄された。次兄は商人であったが、やはりナポレオンのエルバ島脱出の時、軍馬を提供し、兵曹長として働いた。こうしてボナパルチストの家庭に育った Eugénie は将来を嘱望された弁護士でやはりボナパルチストの Niboyet と1822年に結婚した。

彼女の自伝<sup>(4)</sup>によると、1829年にパリに上京したが、この時期は多くの哲学の学派が簇出し、雄弁な弁士たちがそれぞれの教義を情熱を傾けて語り、人々の心に新らしい地平線を描いていたと述べている。しかし彼女がこうした学派に属したことは黙している。

とはいえ彼女がサン=シモン主義者であったことはいくつかの記録に残されている。1830年7月20日の Enfantin から Mlle Sainte-Hilaire に宛てた手紙には Niboyet 夫人が強力な戦力になっていることが記されている。

...madame Bazard qui vous a donné de bons et longs détails, et qui attend votre retour avec impatience pour l'aider. Vous serez maintenant quatre femmes ayant bonnes épaules, vous, madame Simon, et mesdames Cossard et Niboyet.

更に7月26日 D'Eichthal 宛には<sup>(5)</sup>,

Madame Fournel a écrit une lettre charmante(sur la famille) que vous connaissez. Madame Niboyet s'annonce comme devant nous donner de vigoureux coups d'épaule.

Claire Bazard によれば彼女は Laurent 導師によってサン=シモン主義宗教に入り、1830年7月にサン=シモン主義の信仰告白をしている。

また d'Allemagne の調べたある時期の仕事の配分表によれば Predicateurs, Missionnaires, Propagandes, Propagandes des ouvriers, Enseignements, Direction du Globe, Matériel などを受持つ数名の幹部の名があげられており、更に Degré des femmes があってその長は Cécile Fournel. 2<sup>ème</sup> degré, 3<sup>ème</sup> degré に Sophie Lambert, Eugénie Niboyet, Lise Vayron, Caroline Thibault, Hortence Cazeaux の名があって、彼女もサン=シモン宗教の位階制度にくみ入れられていることがわかる。

「1831年4月までは講演はブルジョア階級にむけてなされていた。それはブルジョア階級の教育をすることによって、彼らが民衆の運命を改善するだろうと考えたからであった。最初から労働階級に働きかけると、時期尚早に彼らの期待を過熱させすぎることを恐れたのであった。しかしその心配もないとわかると、サン=シモン主義者たちは平行して労働者たちをも教育した。モンシニ街に特別のクラスがもうけられた。」<sup>(6)</sup>1831年5月には20人ほどの労働者を対象に Henri Fournel と Claire Bazard が毎日曜日サン=シモン宗教を説いた。やがてこの二人の指導者は労働者の妻や姉妹、母たちにも呼びかけをした。聴講者が多くなって会場はより広いテトブー会館に変えられた。この折、教育をより効果的にするために、パリを12区に相当する12地区に分け、各地区に男女各1名の指導者、医者を配して、労働者を改宗させたり、集会をもったりする仕事を受持たせた。テトブー会館でも教義の解説や質疑応答、信仰告白書の朗読が行われる一方、1831年8月からはアンファンタン教父自らがモンシニ街で労働者の degré préparatoire の教育をしている。この時期サン=シモン主義宗教を奉じている労働者は220人で、その半分約100人は女性であったということである。その他予備軍たる聴講者300~400人がいた。Niboyet はこの地区指導者で第四及び第五地区を受持っていた。各地区的指導者名は次のようになっている。

地区	医者	男性指導者	女性指導者
1	Jallet	Moroche	M <sup>me</sup> Dumont

2	Jallet	Clouet	M <sup>me</sup> Dumont
3	Bonamy	Birard	M <sup>me</sup> Birard
4	Bonamy	Botiau	<i>Eugénie Niboyet</i>
5	Bonamy	Botiau	<i>Eugénie Niboyet</i>
6	Lesbazeilles	Prévet	Véturie Espagne
7	Lesbazeilles	Lesbazeilles	Véturie Espagne
8	Lesbazeilles	Bonheur	M <sup>me</sup> Bonheur
9	Courrioé	Leroux	M <sup>me</sup> Bonheur
10	Fuster	Duglay	M <sup>me</sup> Herbault
11	×	Parent	M <sup>me</sup> Laville
12	Lompre	Delaporte	M <sup>me</sup> Hervault

指導者たちの地区での役割りは、信者たちの精神的、物質的状態の詳細な報告を毎週作製すること、信者になることを希望するものに、その誠意を確かめるために一種の身上書を書かせ、信仰告白、過去の生活や現在の生活状態、職業、内面生活の告白をさせたのである。サン=シモン主義者はこうして改宗した労働者に association をつくらせようとした。サン=シモン主義の最終目的である地球的規模での協同、association universelle の第一段階といえる。住宅、暖房、食事のために労働者たちに協同生活をさせることで、部分的に association を実現しようとしたのである。associé になったものは借金を払ってもらい、質屋に入れた品も出してもらい、皆がその稼ぎを共同のものにする。財産のあるものはそれを寄付しなければならない。サン=シモン教の association は絶対的であって、身も心も財産も組織に属するべきである。それ故指導者たちは生活苦を逃れるためにのみ associé になろうとするものと、真面目に教義を実行しようとするものとを見分けねばならない。皆が同じ条件にあるので指導者たちも決して豊かではない。Eugénie Niboyet も自分の fils や filles（サン=シモン用語で自分が改宗させた者たちをこう呼ぶ）に細かい気使いをしている様子が、彼女の報告書からうかがえる。

A la veille d'accoucher se trouvent nos filles Charrain, Lambert et Bar. J'ai donné un berceau à cette dernière aussi qu'une

paillasson et un coussin : je lui ai prêté deux paires de drap, une couverture, un oreiller, deux taies d'oreillers et je lui ai donné quatre chemises : je remettrai demain un coussin à M<sup>me</sup> Lambert et lui dirai de venir chercher à la doctrine la layette de son enfant. (1831年9月3日)

熱心な指導者たちのプロパガンダによって association の原理を受入れる労働者が多くなり, Maison d'association ouvrière を築く方法が模索された。この実現のためにはかなりの費用が必要であって、実行は 1831 年 10 月以降になる。この時点で二軒の労働者の協同の家がつくられた。一軒は第六地区の Prévot たちの rue Popincourt のもの、一軒は第四、五地区の Botiau と Niboyet の受持つ rue de la Tour d'Auvergne のものである。しかし収容人数はかなり制限されて、希望するものを全部入れることはできなかったようである。それにこの維持費はサン=シモン家族の経済に重い負担になっていた。その上サン=シモン教父 Enfantin と Bazard が分裂したことにより、Niboyet など指導者たちの献身的な努力の結果実った折角のこうした下部組織も崩壊せざるをえなかつたであろうが、この maison d'association の経過をくわしくたどる資料がないのは残念である。

### フーリエ主義

サン=シモン教の二人の最高教父の分裂があったのは1831年11月で、その後多くの重要なサン=シモン教宣教師たちが離脱していった。中でも Jules Lechevalier,ついで Abel Transon はフーリエ主義に転向した。彼らはサン=シモン教のプロパガンダの方法を使って講演会を開くなどして、多くのサン=シモン主義者をフーリエ主義にひき入れた。女性の中ではとりわけ Niboyet はフーリエ主義者としての書簡を残して注目されているが、他にも Fanny Schmalzgang, Desirée Veret, Marie-Reine Guindorf<sup>(7)</sup>など *Femme libre* 紙に加った女性の多くがフーリエ主義に移った。

Niboyet は 1832 年にはマコンに住んでいたようで、この町は夫の仕事と関

係が深いのであろうか、一子 Paulin が 1825 年に生れたのもこの町である。Lechevalier に宛てた次のような興味深い手紙もここで書かれている。

「……私はフーリエ氏にとって最も困った先行者はサン=シモン主義だと言えると思います。それはサン=シモン主義が全く信頼されなかつたというのではなく、むしろその反対で、その弟子たちの雄弁や情熱はいたる所で信用を得ました。人々は信仰し、約束されたものの実現を待っていました。ところがこれらの巨人が小人になるのを見た時、何か確かなものをとらえ得ると思っていた所に消えていく影しか見えなかつた時、失望と不信が人々の心を占め、これらの人々と共に神はいられないのだから一体神はどこに存在していられるのかと迷い心を生じたのでした。私はここマコンで夫の地位と私自身に対しても一目おかれ、尊敬されていますが、それにもかかわらず人々は敗れた敵を擁護することを許しません。サン=シモン主義について私が語ることを好みません。それで私はフーリエ氏の学派がサン=シモン主義と何の関係もないことを理解させるのに大へん苦労しています。皆がそこに似たものを見ようとしています。」

(1832年 7月 1日)<sup>(8)</sup>

敬虔なキリスト教徒である Niboyet にとってフーリエの『産業組織』はサン=シモン宗教と違って信仰の分野に介入しないことに好感をもっている。

Comme M. Paget, Je crois que l'organisation industrielle n'a pas besoin pour s'harmoniser de passer par une filière religieuse.

Eugénie Niboyet à J. Lechevalier, 16 juillet 1832.<sup>(9)</sup>

「またそれに習慣も法律も変える必要はない。サン=シモン主義者たちは過渡的手段として、労働者に労働用具を提供するための信用銀行の計画、不動産法の改訂、不動産の動産化、傍系家族の遺産相続の廃止、相続税の新設、直接税の廃止、産業軍団の創設、教育プログラム等々……を提案していた。こうしたプログラムは議会でとり上げられる筈もないし、近い将来に実現できるものでもない。」<sup>(10)</sup> ところが

『Il est facile de parler des théories de M. Charles Fourier et de leur application. Tout le monde la désire : nul n'y répugne.』<sup>(11)</sup> と Niboyet は書いている。そして新らしい教義のためにも彼女は全力投球す

る。1832年7月16日、同様に Lechevalier に宛てた手紙で「遠くからそして長年あなたと同じ道をたどって来た私は、新らしい仕事への心準備ができておりますので、私の参加がお役にたつとお考えの時はいつでも私はあなたのお手伝いができます。すでに私は新聞や本を有効に使っております。……私は Arlès 氏をあなたの陣営につれてきたいと思っております。彼は サン=シモン主義者ですが、大変優秀で、裕富な青年で、リヨンに住んでいます。……彼は サン=シモン教の位階制度には今まで入ったことがないのでより好都合です。……私は私の姉たちにも働きかけたいと思っています。彼女たちは私が熱心な サン=シモン主義者にしたのですが、きっと彼女たちもフーリエ主義者になるでしょう、私が思い違いをしているのでなければ。」<sup>(12)</sup>と書いている。

Niboyet の夫の名はサン=シモン主義の文献には見当らないが、彼もまたサン=シモン主義を通じてフーリエ主義になったことは確かであろう。Nelly Leuitier は M<sup>me</sup>Niboyet が夫に支持され、二人は同じ教義をわかつち合ってきたと記している。

Appuyée sur son mari, qui partageait ses convictions, Mme Niboyet avait, avec lui, adopté en enthousiaste les principes saint-simoniens, et elle a été une des plus ferventes adeptes de cette école philosophique, dans laquelle elle croyait entrevoir le but ardemment désiré de ses aspirations pour le bonheur universel.<sup>(13)</sup>

また J. Gaumont も次のように書いている。

Mais, après la rupture d'Enfantin et de Bazard, les saint-simoniens, désormais soumis aux directions d'Enfantin, ne tardèrent pas à se désagréger. Le premier qui vint à Fourier, en 1832, fut Jules Lechevalier ; le second fut, la même année, Abel Transon. D'autres suivirent, qui constataient, comme Transon, que le saint-simonisme était impuissant «à réaliser l'association». La plupart étaient des hommes d'importance, cultivés et instruits, comme Lechevalier, Transon, Didion, Le Moigne,

ingénieurs, anciens élèves des écoles Polytechnique ou des Ponts-et-Chaussées, le médecin Pellarin, Borrel, Loysel, officiers, comme Renaud, de bons bourgeois, comme Paget, Niboyet, Rességuier, etc.<sup>(14)</sup> (下線筆者)

Niboyet 一家はまもなくリヨンへ移ったと思われる。リヨンは中世以来、労働運動の盛んな町として知られているが、19世紀前半すでに労働者の意識は高く、労働者の知的エリートがつくられ、正しい社会的要求の感覚を持ち、労働者的人格の尊厳を認識し、労働者の解放への努力を始めていた。リヨンの町は労働者の *foyer de lumière* を自認し、彼らの連帯感から新しい形の association philanthropique である Mutuellisme 『Devoir Mutual』が生れていた。7月革命を経て労働者が地歩を固めている Canuts (絹織物工) の町リヨンはさまざまのイデオロギーが民衆のとりあいをしていて Fourier はリヨンに長年住んで *Théorie de quatre mouvements* (1808) をここで書いたのだが、しかしフーリエ主義の影響はサン=シモン主義の影響より後になっている。Laurent, Pierre Leroux や Jean Reynaud も missions saint-simoniens du Midi としてここを訪れ、ヨーロッパのマンチェスターに豊かな土壤をみいだす。彼らのプロパガンダは労働者階級に大いなる知的運動をひきおこし、ここにサン=シモン教会がつくられ、かなり長く機能した。Enfantin の友人でリヨンの有力者である Arlès Dufour は Niboyet も先にあげた手紙で言うように、正式にサン=シモン主義者になったわけではないが、いつもリヨンのサン=シモン主義者の味方であり、保護者であった。Missions がくる以前も Drut, Decaen, Imbert, Peiffer, Morin, Derrion, Cognat (最後の二人はサン=シモン教会の責任者となった) などが Globe 紙などを通じてサン=シモン主義者となった。たえず労働者の暴動をいさめてきたこれら apôtres de paix も 1831 年 11 月の最初のリヨン暴動以後はとりわけプロレタリアの問題に専心するようになる。Reynaud や Leroux が教父の分裂後離脱して、リヨンの教会も混乱をきたしたが、1832 年初め Ribes と Massol の二人の missionnaires が送られてきて活発な宣教活動を再開した。リヨンの重要性を認識して同年 11 月～12 月には missions des prolétaires として Massol と二

人の労働者、11月末に Terson と一人の労働者がパリから送られ、南仏からは Hoart と Bruneau が来て教会の責任者となる。更に第三回、第四回の mission des prolétaires が総勢12人でリヨンにつき、最後に女メシヤ同盟 (Compagnons de la Femme-Messie) としてオリエントへ向うことになる Barraud や Felicien David が 1834 年初めに着いた<sup>(15)</sup>。彼らの活動は次に述べる Mutuellistes にも大きな影響を与えていた。

1831 年秋、Mutuellistes の Bouvery や Charnier など職工長の指導による最低工賃制を要求するデモが整然と行われた。何人かの工場主はこれに署名したが、拒否する工場主もあり、11月21日、リヨンの第一回の canuts の暴動となり、軍隊と国民軍が出動して鎮圧される。これを機にリヨンの最初の労働者新聞 *Echo de la Fabrique* 紙が創刊され、association の権利、coalition の権利、vivre en travaillant の権利を要求する。一年後に *Echo* は Mutuellistes の機関紙となり、『Prolétaires de tout état...unissez-vous!』というプロレタリヤへの呼びかけをなし、caste prolétaire の新聞を標榜する<sup>(16)</sup>。しかし A. Vidal や Arlès Dufour などサン=シモン主義色の強い執筆者もいるし、やがて『Inventeur du Nouveau Monde industriel et sociétai-re』としてフーリエの理論が労働者の救いの手段として説かれ始めると、*Echo de la Fabrique* 紙でも Rivière (cadet) や Berbrugger がフーリエの弟子として論戦を開始する。*Echo* はそれ故サン=シモン主義、フーリエ主義、Mutuellisme、Ferrandinier などさまざまのイデオロギーの寄合世帯の観を呈するようになる。

フーリエ主義のグループをリヨンで最初につくったのは Berbrugger で、これに属したのは Reynier, Imbert, Grillet, Jules Juif, Morellet (この二人は Niboyet の義理の兄弟である)、Niboyet 夫妻、Derrion<sup>(17)</sup>などで、いずれもこの町で重要な地位にある人々であった。Rivière などが 1833 年 9 ~ 11 月にかけて Berbrugger の連続講演会を催し、元サン=シモン派の人々や Mutuellistes から聴講者を募ってグループに編成していった。こうした状況の中で Eugénie Niboyet は女性新聞 *Conseiller des Femmes* 紙を発行することになる。

*Conseiller des Femmes* (女性の助言者紙) (1833年10月1日—1834年9月8日)

Eugénie Niboyet は最初の女性週刊紙 *Conseiller des Femmes* の趣意書で次のように発刊の辞を述べている。現代は新聞の時代であり、情報・文化的交流がパリから地方へまたその逆にと盛んになってきているが、女性紙は非常に少く、しかも女性の教育に関する法律さえない。しかし女性もまた否応なく政治にまき込まれるのであるから、女性の教育をすることによって、女性の周辺の人々に感化を及ぼし、平和と調和の輪をひろげようというのがこの新聞の使命の一つである。

とりわけ民衆の町であるリヨンでは女性は大部分工場などで働いており、あらゆる社会的立場にある女性の条件の改善を目的とする実用新聞にしたいと述べている。女工たちにより影響を与え、道徳教化を目的とするのは48年の *Voice des Femmes* 紙の発刊の動機とも相通じていて一貫した方針となっている。

編集員であろうと思われる何人かの執筆者は48年のフェミニストに近い論説を載せている。例えば Louise Maignard の *De l'avenir des femmes*<sup>(18)</sup> では、現代は様々な意味で過渡期である。この時代に女性の教育問題を考えて、人類の幸福のために利するようにしなければならない、しかしこうした考えは太古からの偏見と嘲笑の厚い壁につきあたることは必至で、よほどの勇気をもたねばならない。この新聞ではとりわけ不幸な立場におかれている労働階級の女性の教育を最大の関心事にしている。世の中の進歩とあわせて女性も進歩しなければならない、それには意見を自由に述べることが基本になる。そして学問と産業の分野にも女性が受け入れられること、教育制度を改善することが必要である。この論説は *Conseiller des Femmes* の基調をなしているもので、非常に明晰な論旨となっている。更に *Fille du peuple*<sup>(19)</sup> と題する論文では、民衆の娘の教育は全くなおざりにされたままであること、手仕事を覚えて女性の仕事はいつも給料が安いなど、精神的にも物質的にも不利益を蒙っていること、また誘惑されて墮落した時罪をさせられるのはいつも女の方だけであるという社会告発をしている。Jane Dubuisson は *Des femmes de la classe ouvrière à Lyon*<sup>(20)</sup> で、リヨンでは6歳の子供が18時間も不衛生な工場で働く

かされ、わずか 8 ソルしかもらえない、若い女も 15~18 時間働き、日曜も祭日もないといった具体的な状況を報告している。その他女性に対し不公正な法律を告発する Ulliac Dudrèzene のいくつかの論説もある。彼女たちもおそらくフーリエ派に属していると思われる。Louise Maignard と Jane Dubuisson の論説は *Echo de la Fabrique* に転載されているし<sup>(21)</sup>、*Conseiller* の No7 では Berbrugger のフーリエ理論についての講演会 Amélioration sans désordres de la condition ouvrière の知らせがある。また N°37 では Michel Derrion の著書 *Constitution de l'industrie ou l'organisation pacifique du commerce et des travailleurs* の書評がある。1834 年 4 月の法律で association が禁じられたにもかかわらず、フーリエ主義は拡大をつづけ、coopérative に逃げ場をみいだし、Derrion は Reynier と共にフーリエ原理に従ってまた彼の著書の実践でもある épicerie coopérative の実験をしている人物である。更につけ加えれば *Conseiller* の出版社はフーリエ派の出版物を出している Boitel である。

ところでこの新聞の最大の目的は女性の教育を改善するよう働きかけることであるが、Niboyet は教育に関する論説をいくつか書いている。No2 の Sur la nécessité d'un nouveau plan d'éducation, No16, No32 で Histoire, No27 Education des femmes, そして No33 Egalité et liberté。最後の論説は Niboyet のいつもの調子を破ってかなり激しい口調になっている。法律をつくり、解釈するのはいつも特権階級たる男性であり、法の前の平等は現実に存在しない。教育が人間の身体的、道徳的、知的発達を可能にして人間の利益を増大させているのだが、プロレタリヤ女性は教育を受けることを阻まれて世の中の進歩を充分享受できないのであり、人生の半分を生きているにすぎない。まず平等な初等教育を授けること、これが職業教育につながり、また生活の条件となるようにすること。そこから結婚の平等と自由が得られると説いている。

Niboyet はしかしむしろ実行の人である。No 14 ではリヨンに Athénée des femmes、初の女子大学を創てようと計画する。知的道徳的協同体をつくることによって女性の進歩に寄与したいと述べている。

カリキュラムは二つのカテゴリーがあって、一つは文法、朗読法、発声法を教えるクラス。もう一つは社会科学、経済学、教育、歴史、文学、倫理からなり、この大学の会員になった教育資格のある女性によって講義は行なわれ、無償である。この計画は資金援助もあって開校にこぎつけ、盛況であったが、1834年4月の絹織工暴動事件で閉鎖せざるを得なかつたようである。

その他にも民衆の子供のために無料の学校（男子校二校、女子校二校）をつくろうとする計画をもち、政府に建物を借すよう請願しているが、これは実現しなかつた。

*Canuts* の暴動については、政治問題を扱わないという立場をとりながらも、多少の言及がある。1834年2月には絹綿ビロード1オースにつき25サンチームの値下げが行われたの対し、全絹織物工の一斉ストが10日続いた。しかし何の成果もなく、*Mutuelliste* と *Ferrandinier* の十数人が逮捕された。この事件に関して No 17 にやゝ曖昧な言い方ながら、工場主は労働者の将来の生活に対する不安な気持を理解してやって欲しいと言い、労働者も参加する合資会社を提案する。

4月には逮捕者の裁判が行われたのを機に第二回の暴動に発展し、軍隊によるリヨンの労働者のすさまじい虐殺が行われた。他の労働者の都市も連帶し、ドーミエで有名なパリのトランスノナン事件もおきている。No 24 でこの暴動に関しての論評は他紙にまかせると逃げながらも、民衆の出でありながら民衆に銃口をむけた兵隊、自分たちの税金で維持されている軍隊が外敵でなく、国内の民衆を攻撃したことに対する非難がある。またこの暴動は給料問題ではなく、*association industrielle* の原理に関わる問題であり、それだから他のプロレタリアの都市も共闘したのだと言う。*Mutuelliste* 裁判は口実で、*association* を禁ずる法が眞の原因であると述べている。（2月のゼネストの後、内相チエールはすべての *associations* を禁ずる法律を通過させていた。）

*Conseiller des Femmes* はおそらくリヨン暴動の影響であろうか、9月には *Mosaïque Lyonnaise-journal littéraire, arts, sciences industries, nouvelles, théâtres, modes*—と衣替えし、編集主幹は Boitel, Niboyet は *rédactrice, co-associée* となり、さらに13号からは Eugène Dufaitelle と

いう人物が管理人になっている。おそらく検閲がきびしくなった故であろうか、*Niboyet* は演劇欄に執筆するのみで、ほとんどが男性執筆陣になり、性格が全く変ってフェミニズムは影をひそめた。1835年1月8日で終刊となっている。

リヨンでは *Conseiller* より前に *Papillon* という教養ある婦人むけの新聞があった。この編集者 Eugène de Lameslière に対して進歩の人として *Niboyet* は新聞発行の前に、敬意を表する手紙を残しているが、この *Papillon* は *Conseiller* の終刊を次のように惜んでいる。「*Conseiller des Femmes* は性急であるが尊敬すべき熱意にかられ、自分の権利よりも快樂を追うことに気をとられ、知識より娯楽の方にずっと関心のある現在に満足した女性に、もっと後でないと理解されない重大で真剣な言葉を、もう一つ別の未来を、あまり早く語りすぎたのだ……<sup>(22)</sup>」

#### キリスト教道徳協会<sup>(23)</sup>

*Niboyet* は自伝に、1830年から文筆によって生活費を稼ぎはじめたと書き、キリスト教道徳協会の懸賞論文に応募したことを記している。彼女はサン=シモン主義に入ったのと同時期に *Société de la morale chrétienne* に関係していたらしい。どちらが先なのかは判然としないが道徳協会の集会室がサン=シモン主義の初めの頃の講演会場に使われていたところから、また道徳協会のメンバーにサン=シモン主義者 Carnot もいることもある<sup>(24)</sup> 彼女が両者に関係したことは頷ける。この協会が募集した懸賞論文に応募して賞金を獲得しているが、しかしこれが彼女のいう1830年からの文筆稼業とすぐには結びつかない。というのは現在残っている彼女の論文の出版年は1836年以後になっている。彼女は自費出版したり雑誌に載ったのもあり一致しないことも考えられるが、しかし *Mosaïque Lyonnaise* の終刊後（1835）パリに出て、この協会の仕事に専念したと考える方が自然に思われる。

*Société de la morale chrétienne* の会長は La Rochefoucault-Liancourt 侯爵で、さまざまの社会活動を行っている。彼女は最初に「盲人とその教育」*Des Aveugles et leur éducation* (1837) の論題に応募した。賞金1000フランと金メダルを盲人学校の教師 Duffant と分与されたと書いている。この論文は

他の四つの協会からも賞を与えられ、ドイツ語・英語にも翻訳された。次に賞を得た論文は「死刑廃止の必要性について」*De la nécessité d'abolir la peine de mort* (1837) で Lamartine が報告者となっている。こうした論文のおかげで Niboyet は協会代理人 Eugène Cassin の推薦により、多くの有名な会員をもつこの協会に入会することができた。そして済生委員会 (comité de bienfaisance) の書記長となり、また孤児委員会 (comité des orphelins) 平和委員会 (comité de la Paix) また監獄委員会 (comité des prisons) のメンバーともなり、監獄の視察もし、パリの監獄の女囚の援助にも献身した。この仕事はカトリック、プロテスタント両委員会をはじめいろいろな方面の助力があり、また監獄制度改革運動で有名なイギリスの Elisabeth Fry の知己を得た。また M<sup>me</sup> Lafayette と一緒にサン=ラザール獄の保育室の中に子供の学校を創った。この時期 Elisabeth Fry に刺戟をうけて「フランスにおける牢獄制度改革について」*De la réforme du système pénitentiaire en France* (1838) を書き、第三の賞を得た。外にも *Dieu manifesté par les œuvres de création* (1839), *Sur la régime cellulaire dans ses rapports avec la santé des détenus*, *Du duel et sa répression* など十二論文が賞に輝いている。こうした仕事や作品によって、彼女はかなりの知名度と世間の尊敬を得ていったことは想像にかたくない。

### La Paix des Deux Mondes, l'Avenir (両世界の平和紙、未来紙)

道徳協会の社会奉仕の仕事にたづさわる一方で彼女は子供のための道徳的童話の創作やイギリス小説の翻訳を手がけていた。特にルソーの影響の濃い Maria Edgeworth の作品は始めて彼女によって紹介された。次にその作品の題名と年代を列挙する。

<i>Les deux frères, histoire intime</i>	1839
<i>Lucien, imité de l'anglais</i>	1841
<i>Quinze jours de vacances, imité de l'anglais</i>	1841
<i>Souvenir d'enfance, imité de l'anglais</i>	1841
<i>Notice historique sur la vie et les ouvrages de G. L. B.</i>	

Wilhem		1843
翻訳		
A. L. Barrauld : Leçons pour les petits enfants		1836
Maria Edgeworth : Forestier ou la manie de l'indépendance	1836	
L. M. Child : Publications bienfaisantes de la Banque philanthropique, Le livre de jeunes mères	1838	
Charles Dickens : Clubs des Pickwistes		1838
Maria Edgeworth : Laurence le paresseux		出版年不明
"    : Marchande de panier, conte		同上
"    : Mime, pigeon blanc		同上
"    : Révolte au pensionat		同上
"    : Simple Suzanne, conte		同上

リヨンからパリに移ってからの十年間に懸賞論文の外にこれだけの文筆活動を行い、その上監獄視察等々の社会活動もするという非常にエネルギーッシュな人物像が浮び上ってくるのであるが、1844年2月15日から再び *La Paix des Deux Mondes* (両世界の平和紙) を発行する。その間に Niboyet は1835年に発刊された月刊紙 *Citateur Feminin* (女性引用句集) —古代から現代までの有名な女性の文章の抜粋を掲載した新聞、発行者は女性らしい——に三論文を掲載している。De l'importance sociale des femmes, De l'infériorité prétendue des femmes, 及び De l'exagération qui concerne les femmes et leur émancipation. でこれは48年の *Voix des femmes* に転載されている。また *Mère de Famille* を編集している Madelène Sirey の文を *Conseiller des Femmes* に載せたこともあるので、何らかの形で Mirabeau の姫 Sirey との関係は続いているだろうと思われる。*Mère de Famille* は月刊のカトリック系新聞で、子供の教育という任務を負った家庭の母親のための非常に教育的できびしいモラルを説いた新聞で、Niboyet の「女性の教育」と一脈通ずるところもある。また Marie Madelène Poutret の発行した非常にラディカルなフェミニズム新聞 *Gazettes des Femmes* (1836—38) 紙上で Hortance Allart が提案した木曜会に Niboyet も出席していたことが知られて

おり、パリの女性ジャーナリストとの交流もあったと考えられる。

一方サン=シモン主義者やフーリエ主義の何人かとは相変らず協力関係が続いていた。とりわけサン=シモン主義者は諸階級間及び諸民族間の平和的アソシエーションを実現するための女性の役割を重要視しているが、元サン=シモン主義者の Niboyet はこの pacifisme と女性の社会的役割 féminisme を結びつける仕事に手をつけた。それが *La Paix des Deux Mondes—Echo des Sociétés de la Paix*—であり、平和主義新聞の先駆である。執筆者には元サン=シモン主義者の Michel Chevalier や Emile Souvestre, de St-Aignan, Comtesse Oleskewitch, ジュネーブ出身で1816年から Société de la Paix をパリにつくっている M<sup>me</sup>comtesse Sellen, 親戚の A. Morellet, Emile Mouchon その他を擁している。2月にロンドンで開催された国際平和会議に出席した彼女は新聞にその報告をし、John Lee の司会のもとで400人から500人が参加した大会であったと書いている。また Thibert 女史も Niboyet がヨーロッパ代表の6人のうちの一人であったと述べている<sup>(25)</sup>。

この新聞は社会と平和との関係を様々な角度から考察しているが、産業と平和に関するサン=シモン主義経済学者 M. Chevalier の論説があり、彼のいう貧者と金持のアソシエーションを可能にする Crédit industrielle は平和の中でしか実現しないと述べている。また労働と平和の関係を述べる論もあり、平和の中でしか民衆の労働意欲は湧かないこと、フランスは戦争に気をとられていたため鉄道や蒸気機関の製作におくれをとったと述べている。

また彼女のキリスト教道徳協会の懸賞論文の論題であった監獄制度の改革、死刑廃止論、決闘の問題が扱われている。監獄制度については Tocqueville の監獄法案の報告が説明されている。また Surveillance (見張り制度)に対する批判がある。大罪人は仕方がないとしても、政治犯や浮浪者にはこれを適用すべきでないとする。パリには一区に24,000人もの極貧者がいて、住居のない浮浪者は最初3ヵ月監禁され、その後2~3年間見張りをされる。しかし浮浪者は住居がないから仕事が見つからない、また職がないから住所不定になると悪循環になっているという。サン=シモン主義の労働者地区指導員となり、また道徳協会の慈善委員会などで奉仕活動をして実情を知る Niboyet はその

改善を訴える。またある執筆者は金持は邸宅内に貧者の家族のために一室を提供することを義務づけ、そうしない者には富裕税をかけるべきだと述べている。

死刑に関しては、大革命以来の数々の動乱の時代を生きてきた Niboyet は死刑によって何も変えることはできない、誰をもよくすることは出来ないと述べ、特に政治犯の死刑廃止論を強調する。また牢獄内での独房の必要性などいろいろな監獄制度の改善案をだしている。

この新聞発刊後3ヵ月ほどして、「正義にもとづいた、法に支えられた強力な平和」をつくるべく *Paix par le Droit* 協会が設立され、定期的に会合が開かれた。最初32人の男性と20人の女性から構成され、外国の平和新聞と提携してプロパガンダを続ける一方で、公開講座をひらき、また懸賞論文を募集する。初回の論題は「世界的、永久的な平和の可能性について、その人類の幸福に対する影響について、及びそれを実現する手段について」であった<sup>(26)</sup>。

10月24日からは *l'Avenir* 紙と改題され、社会悪にますます蝕ばまれていく社会の告発が激しい口調でなされていく。学校や講演会を開いて教育し、様々な社会事業に献身してきた Niboyet にとって、もう社会はそんな生ぬるいことでは間に合わぬところまでできていると思われる。政治がもっと根本的に有効な社会改革をしなければならぬところまでできていると、Niboyet には珍らしいきびしい政治批判を1844年11月に書いている。

*l'Avenir* 紙は1845年2月15日に終刊となった。 (つづく)

### 注

(1) G. Sand et la Révolution de février 駒沢大外国語紀要7号

(2) Tricoteuse

大革命の時、下層階級の女性たちが編物をしながら議会を傍聴していた。非常に評判が悪く、ギロチン・マニアなど様々な悪口を言われた。

(3) Pierre Mouchon

ディドロの百科辞典に *table analytique et raisonnée des matières* の項を執筆した文筆家で牧師。「説教集」がある。ルソー、ネッケル、ボネと交流があった。

(4) 彼女の自伝

*Vrai Livre de Femme* (1868) の後記、*A mes lecteurs et lectrices* に自分の経歴を語っている。第二帝政の時代のもので、ことさらボナバルチストである

ことが強調されている。

- (5) *Oeuvres de Saint-Simon et d'Enfantin VII*。サン=シモン宗教については拙訳「黎明期のフェミニズム」のあとがきを読まれたい。
- (6) *d'Allemagne : Les Saint Simoniens* pp. 121—125. 以下の記述も本書による。
- (7) サン=シモン主義とこれをめぐる女性たちに関しては Laure Adler の「黎明期のフェミニズム」の訳註参照。
- (8) Edith Thomas : *Femmes en 1848* p. 14 から引用。
- (9) Louvencour: *de Henri Saint Simon à Charles Fourier* p. 241 から引用。
- (10) *ibid.* p. 241.
- (11) *ibid.* p. 252.
- (12) *ibid.* p. 302.
- (13) Nelly Leuiter : *Biographies féminines contemporaines [La Vie Domestique No. 6]*
- (14) J. Gaumont : *Histoire générale des corporations en France* p. 106.
- (15) F. Rude : *Les Saint-simoniens et Lyon*
- (16) F. Rude: *Le mouvement ouvrier à Lyon* pp. 25—34.
- (17) J. Gaumont *op. cit.* p. 164.
- (18) *Avenir des femmes.* No. 1. No. 3.
- (19) *Filles du peuple.* No. 23.
- (20) *Des femmes de la classe ouvrière à Lyon* No. 20.
- (21) *Echo de la Fabrique* 27 avril, 23 mars. 1834.
- (22) ロール・アドレール「黎明期のフェミニズム」p. 124
- (23) Société de la morale chrétienne は1820年頃つくられた団体でプロテスタントが主体となっている社会事業団体。
- (24) Margueritte Thibert : *Féminisme dans le socialisme français, de 1830 à 1850* p. 202—203.
- (25) Margueritte Thibert: *Saint-Simonianes et pacifistes* p. 197.
- (26) *ibid.* p. 198.